

## 川村二郎 『語り物の宇宙』

荒 又 雄 介

新刊書としてリアルタイムで読んだのではない。スタートして間もない講談社文芸文庫に収められたときに初めて知ったのである。世代に隔たりがあるため、川村二郎という名前はドイツ文学者としてよりはむしろ文芸批評家として認識していた。

取り扱われているのは「語り物」。柳田国男も折口信夫もともに読んだことのなかった学生には、かなりハードルが高かった。引用される文章は、味わい楽しむ前に、まずは「解説」せねばならなかった。返り点の付いた漢文を久方ぶりに見て、少しげんなりした。それでも放り出さなかったのは、十分理解できたとは言えないこの書物が、自分の全く知らなかった世界を垣間見せてくれているという確信が揺らがなかったからである。

簡潔に述べるなら、それは口承文芸の世界である。作家の個性の刻印を受け、厳密な推敲を重ねたのちに世に出るのとは違う、素朴ではあるが、変転を重ねつつ長い時間を生きてきた物語の魅力である。これを川村は、残されたテキストの味読から探り当てようとする。もちろん、民俗学や神話学の援用によって、思い切った補助線を引くこともある。しかし、やはり何より印象深いのは、テキストの肌目を辿るときの繊細な手つきである。例えば『甲賀三郎』の一場面。地底遍歴を終えた主人公が故郷に戻ってみると「幾百年」の月日が過ぎ去っている。子のない彼には子孫に会う希望もない。こんなことなら地下世界でどうにでもなってしまうえばよかったと主人公は嘆く。「只有リシ処ニテ、左モ右モ成ルベカリシ物ヲトテ、悲シミ居給フ」。いかにも無骨な文章である。これを川村は次のように評する。「長いばかりで着心地の悪い、つぎはぎだらけの甲冑が、それだけに中に包まれた肉体の素肌の悲しみを、強く印象付けるような所がある」。あるいは鬼による人さらいの場面。手元にはらりと落ちた双紙を姫が手に取ると、そこに描かれていた美少年が生身の姿で現れてあっという間に姫をさらって行く。これを川村は「密かな官能の欲求が紡ぎ出した、怪しくも華やかな物語の図柄」と言う。テキストの読解によって、登場人物の悲しみや官能を丁寧に掲げ上げていくのである。

本書は、著者が『甲賀三郎』ゆかりの大岡寺を訪ねるところから始まる。落魄の色濃い境内に物語の痕跡をいたずらに求めた後、参道の脇の石柱に「甲賀三郎兼家旧跡」とあるのを発見した川村は「文字を見にわざわざここまで出かけてきたわけではなかったのに、それしか頼るものがないような気分で、しばらくその標石を見つめていた」と述べている。元来が文字を介さない物語の魅力に、文字を通して追ろうとする著者が、慎ましやかにその決意を述べているようにも見える印象的な一文である。